



Title	100歳の巨匠マヌエル・デ・オリヴェイラ v.s. 欧州 綺羅星の製作者パウロ・ブランコ
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81443
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

100 歳の巨匠健在，作家性溢れる芸術映画，オリヴェイラ作品観客市場の誕生

100 歳の巨匠マヌエル・デ・オリヴェイラ v.s. 欧州綺羅星の製作者パウロ・ブランコ

20 世紀を駆け抜けた巨匠の映画芸術を支えた金庫番プロデューサー

「見る」「知る」「アーカイブ」の「るるぶ」CSCD 電子学際支援サービス・カードを作成していきこうと始めています。みなさんのお知恵を貸して下さい。



写真(左)：リズボン旧市街地にある 80 有余年の歴史を誇る南部料理の老舗「カーザ・ド・アレンテージョ」のロマン主義ジョルジ・コラソ(1868-1924)作「農民の祝祭」室内壁面装飾絵タイル(2006.3.8：撮影)

写真(中央)：リスボン新市街地サルダーニャ侯爵広場(1909 年)の一角にある薬局店舗看板タイル(2007.3.10：撮影)

写真(右)：同広場一角：廃屋に残るチューリップ文様の美しいアールヌーヴォータイル(2007.3.10)

(出典：活動情報：100 歳の巨匠マヌエル・デ・オリヴェイラ v.s. 欧州の綺羅星の製作者パウロ・ブランコ，CSCD，2008.2.22)

パウロ・ブランコ(1950～)はポルトガル映画の名プロデューサー。独裁体制下，英仏に逃避行し，作家性の強い映画に惹かれ，映画館経営術(興行・配給)も身に付ける。1981 年以降オリヴェイラ(1908～)の専従製作者となり，86 年製作会社ジェミニ・フィルムを設立し，あわせてロンドンの製作会社スパイダー・ピクチャーズ，ポルトガルの製作会社マドラゴア・フィルム・プロダクション及び配給会社兼映画館経営会社 [メデイア・フィルム](#)，アタラント・フィルム(DVD 製作販売)，クラブ・フィルム(知財 HP)を一手に経営統括している。[ユーリマージュ](#) Eurimages(EU 加盟国のうち 2 か国以上の合作に製作助成金が支給される制度)により多国籍映画製作を実現し，芸術性の高い作家映画は国際的な評価を得，絶対数は少なくとも世界中に観客市場を獲得し，1993 年オリヴェイラ監督作品「[アブラハム溪谷](#)」以降は日本でもオリヴェイラ作品観客市場の波が押し寄せた。また 1997 年「欧州の偉大なるプロデューサー」最高賞の榮譽に浴したのである。(新訂増補版『スペイン・ポルトガルを知る事典』(2001，平凡社)の映画関連拙稿項目より)

映画 HP「[永遠の語らい](#)」ユーロ・ヴァージョンの予告編が附されている。そのため字幕はポルトガル語になっている。また 2004 年大阪で上映された[梅田 O S 劇場 C.A.P](#)に関する

る情報も参照されたい。

2004 年「永遠の語らい」の関係者試写後、ある新聞記者から、映画終盤ギリシャの名女優イレネ・パパス(1926～)が暗示的なギリシャ民謡を静かに歌い上げる夕食会の場面で背景に現れる、豪華客船食堂壁面を飾る絵画は何かと質問が寄せられ、その場では分らず、その後、映画製作者との電子メールの遣り取りで、タペストリー「ブドウ畑 (Vindimas)」であることが判明。20 世紀ポルトガル・モダニズム運動において指導的な役割を果たし、詩人・劇作家・舞台美術家・エッセイスト・評論家・画家・思想家として多彩な活動を展開し、1940 年代に制作したフレスコ画・デッサン画の卓抜したセンスが高く評価されたアルマダ・ネグレイロス(Almada Negreiros : 1893-1970 年)作「ブドウ畑」をモチーフにした、豪華造形主義を誇るタペストリー製作者ギリエルメ・カマリーニャ(Guilherme Camarinha : 1912-1994 年)によるタペストリー(綴織錦)(1961 年)であった。大阪上映の折に別途配布物を用意した。

なお、オリヴェイラ監督は(2008-2015)、106 歳で他界している。

その後、日本では 2014 年に公開され、ポルトガル映画ファン層が劇的に増加した新星ミゲル・ゴメス(1972～)監督「熱波([Tabu](#))」(2012 年：ベルリン国際映画祭銀熊賞)の主演の一人、舞台女優テレザ・マドルーガ(1953～)に日本映画関係者(所謂作家映画ファン)の注目が集まった。林田もその一人である。

スイスの作家映画監督[アラン・タネール](#)(1929～)のロード・ムービー多国籍映画「[白い町で](#)」(1983)に彼女は、「ベルリン・天使の詩」(1987 年)主演で世界的に令名を馳せることになるスイス人俳優故・ブルーノ・ガンツ(1941-2019)と共演し、当時一躍国際的に知られるようになった。実はこの映画が 1986 年日本公開される時、字幕製作者友人の依頼でポルトガル語セリフの部分の字幕を作成した経緯があって、字幕確認も兼ねた事前上映会(銀座：非試写会)で故・淀川長治(1909-1998)と狭い暗室の中、隣席し、驚いたことを覚えている。その後、実際に、初めて銀幕観賞したのは大阪であった。その時に初めて気付いたのがプロデューサーパウロ・ブランコの名前で、ラテン系だなあというくらいに鈍感であった。その後、新訂増補版『スペイン・ポルトガルを知る事典』新項目の原稿依頼に白羽の矢が立てられ、パウロ・ブランコの項目を執筆して、初めて追認したのが実際のところである。

さらに記憶は遡り、1980 年リスボン留学初年度に、フィゲイラ・ダ・フォス国際映画祭(1972-2002 ; 2014 年再開)に観客参加した。独裁政権時代末期(1933-1974)から始まり、映画メディアを通して、海外情報を吸収しようという意図の映画祭であった。その時主催者の一人に親切的な人物がいて、アラン・タネール映画特集が組まれたこともあり、本人が来場し、上記「白い町で」の打ち合わせ、その後、リスボン下見も兼ねて、パウロ・ブランコを帯同していることを耳打ちしてくれた。ただ、その頃は、タネール映画を初めて観賞し、緑を基調にした清新な映像感覚に魅了されるばかりで、ポルトガルの若き製作者のことなど「無知の知」にも至らぬ門前の小僧以下であった。

日本からは、その後、社会派映画作家として高く評価を得る柳町光男監督(1945～)劇映画デビュー作「十九歳の地図」(中上健次短編原作)がコンペティション部門で参加し、上映後、制作関係者の通訳を依頼された。

ところで、「熱波」で撮影時、ロケに利用された映画館がリスボンの名画上映館シネマ・ニマス(上記 Medeia Filmes 傘下)で、留学時代よく出かけ、「熱波」のこともあり、最近も出かけ、変わらぬ姿に妙に感激した。